

【臨床・研究】

人工唾液を口腔に反復噴霧し嚥下回数を
数えた嚥下障害者の嚥下関連症状と転帰

き 木 佐 俊 郎¹⁾²⁾ さ 酒 井 康 生²⁾
ふ 福 間 丈 史³⁾

キーワード：反復唾液嚥下テスト (RSST)，対象外症例，
嚥下障害，人工唾液，認知症

要 旨

【目的】反復唾液嚥下テスト (RSST) の嚥下指示理解が不能として RSST の対象外とされる嚥下障害群の実態を明らかにする。【対象と方法】対象は，RSST 実施時に口腔乾燥が強く唾液随意嚥下に支障がある場合に使われる人工唾液を口腔に反復噴霧し嚥下回数を数えた嚥下障害者90例。嚥下回数が3回/30秒以上か否かで2群に分け，嚥下関連症状と転帰を調査した。【結果】嚥下回数が3回/30秒未満群では，発話が無いか不明瞭，S-SPT 潜時延長，血清アルブミン値低下，MWST で3b 以下，咽頭感覚無し，摂食形態がコード2-1に留まった症例が有意に多かった。死亡転帰者の生存期間も短かった。2群間で慢性呼吸疾患増悪，覚識不良，認知障害の頻度に有意差無く，無経口～お楽しみレベル，代替栄養，肺炎，死亡，嚥下障害関連死の転帰例にも有意差は無かった。【結論】RSST の指示理解不能で対象外となる嚥下障害群の実態が明らかになった。

目 的

反復唾液嚥下テスト (the Repetitive saliva swallowing test : RSST) は唾液の空嚥下 (dry swallow: DS) を「できるだけ何回も“ごっくん”と唾を飲み込むことを繰り返してください」

と指示し，検者が被験者の喉頭隆起と舌骨に軽く指腹を当てて喉頭挙上を確認する触診法により，30秒間に反復可能なDSの回数を測定する方法である¹⁻²⁾。口腔内乾燥が強い患者には人工唾液（サリベート[®]）を口腔内に噴霧し命令嚥下を促す手技（artificial saliva swallow : AS）が許容され，DSと比べ平均嚥下回数に有意差を認めなかったと報告されている¹⁾。

嚥下障害の臨床場面では，DSを促す指示を理解できず，RSSTの対象外とされる嚥下障害者が少なくない。急性期病院からの報告では，前田

Toshiro KISA et al.

1) 松江生協病院 リハビリテーション科

2) 島根大学医学部 リハビリテーション医学講座

3) 松江生協病院 リハビリテーション室

連絡先：〒690-8522 島根県松江市西津田8-8-8

松江生協病院 リハビリテーション科